

伊藤整全集

第四卷

伊藤整全集

4

新潮社版

編纂

瀬沼茂樹

平野謙

小田切進

奥野健男

得能五郎の生活と意見・得能物語 他

定価二〇〇〇円

昭和四十七年十二月十日 印刷
昭和四十七年十二月十五日 発行

著者 伊藤 整

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一電話
東京二六〇一一一一郵便番
号一六二振替東京八〇八

印刷所 株式会社精興社

製本所 株式会社大進堂

伊藤整全集

— 4 —

© Sadako Itō
1972. Printed
in Japan.

乱丁、落丁本
はお取替えい
たします。

伊藤整全集 第4卷 目次

得能五郎の生活と意見

- | | |
|----|-----------|
| 一 | 空地耕作 |
| 二 | 再び空地耕作 |
| 三 | 鞭 |
| 四 | 新聞読み |
| 五 | マルブルウの歌 |
| 六 | 再びマルブルウの歌 |
| 七 | トロイカ |
| 八 | 交通機関について |
| 九 | 三十五歳の紳士 |
| 十 | 座談 |
| 十一 | 桜谷多助のノオト |
| 十二 | 得能先生の登校 |

一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 九 八 七 六 五 四 三 二 一

得能物語

一	人間の顔	二八
二	鯉の頭	三七
三	砂谷村風土記	三八
四	砂谷村人物伝	四九
五	桜谷と得能	四四
六	桜谷の日記	八一
七	蝶の話	九二
八	葛の葉	三二
九	蟻の挿話	三〇
十	勸進帳	三七
十一	得能の炊事	三三

十三 歴史の波

後書

三八七
四〇〇

ホオマア物語

一 シュリイマンの話

四〇二

二 始祖

四二一

三 女

四三七

四 神と人

四三七

五 女神の愛

四五六

ヒサ子の生い立ち

一 童女の像

四六六

二	少女の像
三	妻の像

四六	
五二	

*

細川書店版『得能五郎の生活と意見』

あとがき

五八

講談社版『得能物語』後記

五二

*

編集後記

瀬沼茂樹

五三

伊藤整全集 第4卷 (小説)

得能五郎の生活と意見

一 空地耕作

得能五郎は、隣の室で食事をする二人の子供の物音で眼が覚める。ほら、エプロンをしないで食べている人はだあれ、とか、おみおつけを残してはいけません、などという里子の声に混って、茶碗の音がし、やがて、忘れものはありませんか、という声に送られて、行って参りまあす、と玄関の硝子戸をびしゃんとはげしく閉める。そして玄関から三尺ほどしか離れていない門のそとの敷石をわたってゆく二年生の一郎と一年生の二郎の、かたことかたことという小さな靴音が耳に入るようなときは、寝足りた氣持で次第に眼が覚めて来ている。

そのときでも、彼は注意深く睡眠の量をはかる。もう眠りが足りたかどうか、彼は容器のなかで何かの液体をゆす

ぶるように頭をすこし動かして見る。その動揺が頭の隅々まで行きわたるようだと眠りが足りたと思うのだ。すると得能は、枕もとの新聞に手をのぼし、印刷インクの匂いをかきながらそれを広げる。この頃（というのは昭和十五年の春から夏にかけて）得能は、新聞をひろげるや否や、忽ち頭がはつきりとし、政治外交の大見出しに眼を走らせる。支那事変が四年続いている上に、ヨーロッパ戦争がノルウェーから、オランダ、ベルギー、フランスと、次々に戦闘区域を拡げて行っているの、朝ごとに、次はどうなっているかという期待でもって新聞をひろげるのだ。

三年前の七月には支那事変が北京の郊外に起って、全支那に波及し、日本は北支那一帯と揚子江の流域に軍を進め、上海、南京、徐州、漢口、広東、南寧を占領した。そして占領地域の治安工作に専念している。ところが去年の九月に、ドイツがポーランドに侵入し、同時にイギリスとフランスがドイツに宣戦した。その後今年の四月までは、たがいにおり小さな戦闘や空襲をしているだけであったが、四月八日にイギリスがノルウェーの沿岸に機械水雷を敷設したと発表すると、翌九日にはドイツはデンマークを占領し、海を渡ってノルウェーのオスロに兵を進めた。ドイツがノルウェーの飛行場を占領したとか、イギリスとフランスがノルウェー中部の港に上陸したとか、更にその中部ノ

ルウェイから英仏軍が撤退したとか、北部ノルウェイの鉄鉱輸出港ナルヴィクでは、ドイツの駆逐艦七隻がイギリス海軍に沈められたとか、イギリスの戦艦がナルヴィクの沖でドイツの飛行機に撃沈され、それが海軍力に対する空軍力の優越を決定したとか、そういう騒然たる記事が、毎日の新聞を埋めていた。

ドイツ軍は五月の十日に突如オランダ、ベルギーに侵入し、一週間のうちにオランダ軍を降伏させ、ベルギーの首府ブラッセルに入城した。得能は、英仏側とドイツ側と中立国の報道とを丹念にくらべ、毎朝長いことかかって新聞を読む習慣であった。朝得能が眼を覚ませば、どういふことがはじまっているかわからないのである。うっかり八九時間も眠って、ヨーロッパのこの壮大な事件の進行から自分が眼を放していたそのあいだにも、砲弾が破裂し、武装した兵や戦車が他国に殺到し、死にかけた人間が顔をゆがめ、国王は国を失い、弾丸の中に右往左往する人民がいるという想念で得能は寢覚めぎわの眼をばちばちさせる。もっとしっかり覚めないと、何か勘違いをするぞという警戒心が湧く。支那事変がはじまってから、彼は屢々そういう、俺は今こうしていいのだろうかという衝動を受ける。

というのは、彼の日常生活があまり平穩で、自分の国の

兵士たちが支那で戦い、毎日負傷したり、死んだりしているその同じ日、自分は、毎日八時間眠らなければ仕事ができないと言って、眠り足るだけ眠り、寢床のなかで三種ものの新聞を隅から隅まで読みつくさないうちは起き出さないという朝寝の習慣を守りとおしているからである。得能は昼間でも、時おり、はっと思うことがある。電車の中などではっとしてあたりを見まわすと、やっぱり小学生は構って合っており、紳士らしい男はまことに無為な顔で正面を向いて腰かけており、品のよいお婆さんが風呂敷包みに白い手をのせている。窓の外を、百貨店の二三階だとか、商店の看板のようなものが動いてゆく。彼の身のまわりにはそういう静かな、市民的な風景しかない。そうすると、ああ、自分もこういう風景のなかの一員だ、それでいい、という気持で、ポケットから小型の書物を出して読みはじめる。

しかし得能家の生活や、彼のまわりの市民たちの生活にも、かなり濃く戦時の翳が及んでいる。事変のはじまった一年目、二年目までは、応召した友人や町内の人を見送ることや、そういう見送りの群集に街や駅頭で逢うこと、千人針を手にした少女や、老婆や、細君らしい女性たちを街頭で見かけることが、生活においての戦時色の主なものであったが、今はもっと違った日常生活の細かな部分にそれ

が及んで来ている。

得能は新聞を読み終ると、枕もとの郵便物に眼をとおす。たいていそれは、帯封をした郷里の新聞とハトロン紙の封筒に入った二三種の雑誌（これは、主に同人雑誌という、文学を研究する人々の団体が小部数刷って文学者仲間配る研究的な薄い雑誌であるが、その他に商業的に広く売られている雑誌の寄贈されたものもある）と、文学者である得能に原稿を依頼したり、催促したりする手紙の類と、いろいろな会合や映画の試写会などの案内状などである。彼はそれ等の郵便物の中から一つ二つを開いて見るだけで、あとはそのまま重ねてしまう。そして、腕を大きく伸ばし、うんと寢床の上で反って、

「うわあっ」という、大声を発してあくびをする。それは余程大きな声であるらしく、得能自身は口を開いた瞬間には、顎骨のつけ根にあたる耳の辺がききりと鳴って、耳の調子が狂うのでよく聞えないが、襖のかげに坐っている妻の里子は、

「ああ、びっくりした」と、必ずその度に言うのである。

「よしと下さいな、近所隣にみっともないから」

両隣と裏の家とは、それぞれ二間乃至三間ぐらいしか離れていないので、夏などは北窓をすっかり開けて簾を下げているだけだから、裏の家とは一軒の家のようになつてし

まう。里子が言うのも尤もである。しかし得能はやめるわけにゆかない。このあくびの癖のついたのは何年ぐらい前のことか知らないが、今ではそれをしなければ、得能は、自分の身体や心に一日のはじまりの区切りをつけることができないようになっていた。この場合は、よし、これで今日の世界の形勢はわかった。さていよいよ、自分も起き出そうか、というほどの意味なのである。得能はふだん、極く紳士らしく身を持している。隣近所の人に逢うと、にこにこして鄭重に帽子をとって挨拶するか、または数年来の見識り越しであるにかかわらず口を利いたことのない人には苦虫を噛みつぶしたような無愛想な知らぬ顔をする。どちらにしても、近所の人に話しかけるといふことはほとんどない。ともかく得能は、そういう紳士らしい身の持しかたをしている自分の殻をも、いま、この吠えるようなあくびで一挙に吹きとばしてしまい、自分の水々しい精気を、眠り足りた朝の体内から湧き上らせよう、という気持だ。裏や隣の人に対してはみっともないが、得能にすれば、僕にはなにもあなた方に見せているあの顔のような紳士じゃないのですよ、何とでも勝手に思つて下さいよ、という横着な気持になっている。そのあくびをやらすには、得能の日ははじまらないのである。

彼は水で顔を洗い、簡単な食事をする。食事がすむと彼

はもう階下の室にいる用がない。女中が彼の食べた茶碗類をさげてゆき、里子が縫物をひろげたり、寝台に寝に行ったり（里子は病弱なので、一年のうち四分の一ぐらいの日は寝台で寝ころんだり、起きたりしている）してしまふと、彼のまわりの畳には、何もなくなり、いよいよ自分の仕事に向う時である。

そこで得能は、もう一度、

「うわあっ！」とあくびをして、両腕を天井の方に突きあげ、それから「さあて、何をしようかなあ」と言う。

彼はそう言いながら、茶の間の棚にある小型の置時計を見るのだが、ほとんどきまつてそれは十時半を指している。彼が前夜友人と街で逢つて十二時か一時頃まで喋つたり酒を飲んだり（もっともそれは昨年頃までのことで、この頃では街で酒を飲む場所は十一時に店を閉めるようになって）したときだとか、仕事がいよいよ間に合わなくなつて夜明けまで起きて書いていたときなどをのぞけば、得能は十二時頃に眠り、八時頃眼を覚まし、新聞を二時間ほどかかつて読み、三十分で朝食をする。そして、済むのが十時半であるという風にきまつて、（ちつとも自分ではきめていないのだが）運んでいる。

すると里子はまた得能をたしなめる。

「その、わあつて言うのを聞く度に、私は胸がときどきし

て困るのよ。ほんとにみつともないわ」

子供たちもまた学校へ行く年頃までに、得能のその癖をすっかり覚えてしまつてゐるのだらう、日曜とか夏休みなどになると、朝の十時ごろ得能のあくびのすぐ後について、やっぱり同じように細い腕で天井の方を突きながら、

「うわあっ！ さあて、何をしようかなあ」とやる。そればかりでない。一郎も二郎も、縁側で遊びすぎたりして自発的な自然なあくびをするときもやっぱりその形式で、

「うわあっ！」と小型にやる。それを見たときは、さすがに得能も、おかしくもあり、心配にもなつてきた。こいつはいけない、と思った。とにかく、子供のいるところでは、この獣の吠えるようなやつは、やめなければいけない。

今日は得能は、子供がいないので、思い切り大きくあくびをしてから郵便物を持つて、二階の書斎へ上つて行つた。南北に長い六畳間で、南側に一間半、北側に一間の硝子窓がついてゐる。西側の床の間は、三方の壁が本で一面にふさがれており、真中も、雑誌類や小包で送つて来たまま解いていない本などでふさがつてゐる。その隣の押入れも本を詰めた箱で一ぱいになっており、反対側の壁にも本棚が二つ寄せかけてある。彼のような仕事をする人間としては、本は多い方ではないが、それでもこの貧弱な貸家の二階は、本のためにどこなくゆるんでおり、彼が室内を歩くと、

ゆらゆらと揺れ動くのである。彼は南側の窓を開いて、外を眺めた。そして、いよいよ、これはこうしていられない、と思った。というのは、彼の開拓事業が、途中で放棄されたまま、眼の前の原っぱにまざまざと見えているからである。

得能の住んでいるこの東京の新市域、つまり実質的には郊外は、まだそう家が立てこんでいるという程でない。彼の家の東、北、西には、二間か三間ぐらいのあいだをおいて家が建っていて、その一劃だけ、遠くから見ると、原っぱの中に身を寄せ合うように四五軒の二階家が同じ恰好でくっついていて、そのまわりは、まだ大方原っぱである。ただその一群の家屋の西側だけは道沿いに家が五六軒づついていて、バスの通る細長い家並町につながっている。得能の家の南側は、腰から頭の辺までの高さの板塀で囲われており、その前に二間ほどの道路が東西に走っている。その道路の南側は、草ぼうぼうの空地だ。もっとも一町四方ほどずつに区切られて、道路と簡単な下水の溝ができているから、住宅地として売出しているのであろう。

その原っぱを二町ほど突っ切った先に、西方から東方へと川が流れている。得能が、建つてすぐのこの家へ越して来てから、その川は護岸工事をされて、兩岸はコンクリートで二尺ほど地面よりも高くなっている。川幅は四間ほど

ある。そして得能の家の正面から見えるあたりにはコンクリートの橋ができた。川の向う岸は、高台になって、崖に一面に樹木が生えている。この高台は府立女学校の建築予定地になっている。しかし得能はそういう地勢をいま眺めているわけではない。すぐ家の前の、道路を越した空地である。ちょうど彼の家の前は赤土がむき出しになっており、家が一軒建つぐらいが掘りかえされて畑になっている。その三分の一ぐらいには馬鈴薯が五寸ほど芽を出している。その右手には玉蜀黍が三列ほど、これは細い華奢な芽がやっぱり五六寸に伸びている。ずっと手前の道路寄りには、葱畑が二坪ほどあるが、そのまわりは草が一面に茂っている。それから馬鈴薯畑の左の方の五六坪の空地は、赤土が一部分掘りかえされて、三尺ほどの山になり、その手前の部分は黒い土ののぞいた暫擾のような穴になっている。それは得能がいま開墾している部分なのだ。

得能は、ここへ越して来てから満四年ほどになり、その一劃の五軒の中では、大家よりも古い（大家は離れた処に住んでいたが、後に自分の持家に越して来たのだ）のであるが、土地の「開墾」について一番新しく、今年からはじめたのだ。この辺一帯の空地の持主は誰なのかよくわからないが、住んでいる者はみな自分の家のまわりの空地に勝手に畑をつくっている。ことに去年あたりからそれが非常